



第8回年会特集 第2弾 ～年会に参加して～

年会に参加された若手・中堅の研究者から年会の感想を寄せていただきました

▶ 2014年5月25日～5月27日の3日間、東京大学内伊藤国際学術センターで行われた第8回日本エピジェネティクス研究会年会に参加いたしました。本年会では一般講演として発表する機会を頂き、年会長の塩田先生（東京大学）をはじめ組織委員の先生方には大変感謝致しております。自身の発表に関しましては、毎回準備不足と詰めの甘さを反省するのですが、やはり今回ももう少し丁寧な検討が必要であることを痛感いたしました。今回指摘して頂いた事を生かし、より良い仕事へと発展させられるように努力したいと思っております。

本年会は塩田先生の開会の挨拶から始まり、終始和やかな温かい雰囲気の中で進行したように思います。肩肘を張らずに若い研究者が大御所の先生方に話しかけられる雰囲気は、この会の良いところの一つだと思っています。ポスター会場でも、若い研究者がポスターの前に張り付いて積極的に質問しており、エピジェネティクス分野の勢いを感じました（その勢いに押され、なかなか前に出られませんでした）。

特別講演1ではヒストン修飾、特別講演2ではヒストンバリエーションの話が中心でゲノムが巻き付いているヒストンの重要性や面白さを再確認いたしました。相賀先生（国立遺伝学研究所）の細やかな仕事ぶりには毎回感心させられるのですが、今回もその迫力あるデータ量に圧倒させられました。

昨今は研究費獲得の申請書のメ切りに追われ、研究費を獲得するために研究を行っているような錯覚に陥ることがままあるのですが、今回、若山先生（山梨大学）のご講演を拝聴し、「知りたいことがあるから研究をするんだ」というごく当たり前のシンプルな動機を思い出させて頂く事が出来たように思います。知的好奇心を忘れては面白い研究など出来るはずがないわけで、無限の可能性を信じて

日々の研究に取り組まなければならないと心に誓って帰宅いたしました。

目黒 牧子
金沢大学学際科学実験
センター
研究員



▶ 第8回年会に参加しました。本年会では「ポストエピジェネティクス時代のエピジェネティクス」というテーマのもと、様々な分野からホットでエキサイティングな内容の発表があり、とても濃厚かつ有意義な3日間を過ごすことができました。また会場が東京大学構内にあり、個人的には空き時間に構内や周辺を散策できたことも楽しかったです。

私は大学院3年目の春、ちょうど研究にのめり込み始めた頃に、記念すべき第1回の年会に参加しました。こんなに面白い研究会が発足するのだ！と興奮気味の故豊田実先生に連れられ、大阪まで行きました。当時は癌におけるDNAメチル化の研究をしており、それがエピジェネティクスだと思い込んでいた私にとって、この研究会での分野をまたいだ幅広いトピックはとても新鮮であり衝撃を受けたのを覚えています。エピジェネティクスというキーワードを通じて異分野の研究者達とフランクに交流できる、非常に魅力的な会でした。それから8年が過ぎ、次世代シーケンサー等の新技術の登場もあり、エピジェネティクス研究は飛躍的に進展しました。今や生命科学を理解する上でエピジェネティックな視点を持つ事は必須になった感があります。それでも本研究会のアットホームな雰囲気と分野を越えた横断的なつながりは健在で、年会でも様々な方と熱くディスカッションをして、交流することができました。今後もこのような会が継続されることを強く望みます。

私はがん研究を一貫して行っており、本研究会は「ポストエピジェネティクス時代のがん研究」はどうあるべきかを改めて考えさせられる良い機会となりました。今のがん研究には大きなブレークスルーが必要であると強く感じますし、「がんに生じる普遍的なエピゲノム変化」がその鍵を握っていると信じています。がん研究に少しでも貢献できるような仕事をして、それをいつか年会で発表できるよう、日々研究に励みたいと思います。

丸山玲緒
札幌医科大学 医学部
准教授





▶ 年会長の塩田教授の細胞生化学研究室所属ということで、第8回年会にスタッフとして参加させて頂きました。私は会場のアナウンス係を担当だったので、小学校の放送部に所属していた時以来の久しぶりの役目にドキドキしながらも、舞台のすぐ近くで全ての講演を聞くことができました。学会で講演を聞くのは今回が初めてだったのですが、本当に多くの刺激を受けることが出来ました。中でも相賀先生のマウス生殖細胞の性分化制御機構についてのお話は大変興味深く、仮説に続いて次々と美しいデータが示される様子に感動しました。また、ベテランの先生方の個性豊かなプレゼンテーション術も非常に刺激的でした。胡桃坂先生の熱弁には圧倒されましたし、若山先生のお話は終止笑いに包まれていましたが本当に面白かったです。

さて、今回の年会では、塩田年会長の意向で海外から4名もの先生が講演して下さり、更に女性研究者の講演が多く設けられ、例年と比べると異色のプログラムで行われました。そのため、最終日の3日目は女性研究者フィーチャーだったのですが、どの講演でも活発に質疑応答が行われ、様々な研究内容を聞くことができました。同じ女性として、多くの女性研究者が活躍されている様子を伺えたのは大変嬉しく、勇気づけられました。しかし同時に、エピジェネティクス研究会のような場においても日本ではまだ女性がある種の弱者として特別扱いされるということには悲しさを覚えます。年会初日に開会挨拶を聞いて、今年の東京大学若しくは大学院の入学式で話された方全員が、海外のトップレベルの大学と比較しても東京大学には女子学生が少ないことが問題であるというお話をされていて非常に驚いたことを思い出しました。中学・高校の頃は自分が社会に出る頃には日本でも女性の活躍が女性だからと特別視されることはなくなるだろうと暢気に思っておりましたが、気づけばその時まであと1年半。私も講演された先生方の様に活躍できるようになって、女性が特別扱いされないような社会にしたいと気合いを入れ直した最終日でした。



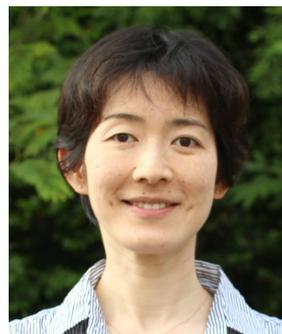
次回第9回年会では聞くだけではなく自身が発表できるよう、1年間研究に励みたいと思います。

谷 瑠依子
東京大学 農学生命科学研究科
修士1年

▶ 2年ぶりの年会参加のため、子連れで上京した甲斐がありました。私自身は3年前に脳神経に分野を変えながらもクロマチン制御の観点から研究を続けようと試みているのですが、周りにクロマチン関連の研究者がほとんどおらず、また地方在住で子供二人と身動きの取りにくいこともあり、このような会に参加して一度に色々な話を聞けるのは本当に有り難いです。浦島太郎の気分だったのが、どんどん活性化されました。発表全体を見渡してみるとDNA・ヒストン制御等の基本メカニズムから発生や疾患との関連でエピジェネティクスの視点を取り入れるものまで様々あり、本会が多様な観点からエピジェネティクスに関わる研究者の集まれる場であると改めて認識しました。

口頭発表では海外演者4人の講演を初め幅広いテーマで最新の話題が聞け、充実した3日間でした。中でもDr. Saadi Khochbin (フランス) や岡田由紀先生 (東大) によるヒストンバリエーションを介した精子クロマチンの再編成の話は、次世代にエピゲノム情報を伝達する仕組みの本質に迫るものであり、非常にワクワクさせられました。また、Dr. Axel Imhof (ドイツ) はショウジョウバエを用いて種間雑種が生殖致死になる理由を、セントロメアタンパク質の量の違いによるトランスポゾンの脱抑制で説明しており、興味深かったです。そして今回最も印象に残っているのは若山先生のお話です。誠実かつユーモラスな人柄を表す口調で語られた、オリジナリティ溢れる数々のクローン研究秘話には聴衆皆が引き込まれたのではないのでしょうか。16年モノのマウス屍体からクローンを作出した話、フリーズドライ精子を宇宙に打ち上げるに至った話等、興味深い現象(疑問)を追求する姿勢に感動するとともに、サイエンスの原点に立ち返る思いでした。

また今回研究内容とは別に、複数の方々と話題になったこととして、研究者夫婦のキャリアパス、育児をしながらの研究生活について等がありました。皆それぞれ限られた条件の中で自分たちのスタイルを選択し研究されていることに勇気付けられました。今後も年会に参加して色々な方と交流を図るとともに、今回2割程度だった女性の発表者の割合を上げることに貢献したいと思います。



酒井 晶子
新潟大学医歯学総合研究
日本学術振興会特別研究員
(RPD)



▶ 本年度もエピジェネティクス研究会年会に参加させて頂きました。今回の研究会では、エピジェネティクス研究の“幅の広さ”を強く感じさせられました。本研究会は、エピジェネティクスを架け橋として、多岐にわたる分野の研究者が集まり、密で活発な議論を交わしているとても魅力的な研究会だと思います。毎年の研究会を通していただけるのですが、今年も初日に開催された懇親会では、いつもは簡単に話したりできないような先生と初めて学会に来たばかりの学生が、同じ会話の中にいるという状況が多く見られ、色々な研究者と出会うチャンスが多かったと感じます。

本年会の発表内容では、「ポスト・エピジェネティクス時代のエピジェネティクス」というテーマを受け、DNAメチル化やヒストン修飾といった代表的なエピジェネティクス機構に関する研究のみならず、長期的ゲノム制御機構に関与する生命現象を取り上げた研究が多く報告されていました。例えば、ヒストンバリエントによるクロマチン構造のダイナミクスについてご発表された胡桃坂先生や、クロマチンファイバーの単離と解きほぐしについての御発表された小穴先生など、クロマチンの微小な三次元構造そのものにアプローチする

研究から、統合失調症の病態にLINE-1が関与するという文東先生の御発表されたヒトの疾患研究など、研究テーマの幅の広さを感じられる御講演が多く見られました。さらに、無限クローンの可能性について御講演された若山先生の研究では、クローンを通してマンモスから宇宙までという研究内容の幅の広さには驚かされた方も多かったのではないのでしょうか。

最後に、4月にロックフェラー大学のC. David Allis博士が日本国際賞を受賞され、エピジェネティクス研究分野が広く認められたのに合わせたように、本研究会は改めてエピジェネティクス研究のこれからの可能性を示す研究会であったと思います。自分自身も、このエピジェネティクス研究の幅の広さを活かし、少しでも展開できるように努力していきたいと思えます。



池上 大悟
星薬科大学薬理学教室
助教

情報を求めています！！

研究員・ポスドク募集および他の研究会のお知らせなど、ニュースレターを利用して公開してみませんか。年会に関するご意見・ご感想もよろしく願います。お近くの広報委員（中島欽一、梅澤明弘、角谷徹二、古関明彦、中山潤一各幹事）に気軽にe-mailください。

日本エピジェネティクス研究会事務局

山梨大学大学院医学工学総合研究部
環境遺伝医学講座内
庶務委員長 久保田健夫
担当：岡崎恵美
住所：〒409-3898 山梨県中央市下河東1110
TEL: 055-273-9557 / FAX: 055-237-9561
E-mail: jse-jimukyoku@yamanashi.ac.jp